哲學研究　第二百四十六號　第二十一卷　第九冊

知覺論　第一部　ゲシタルト心理學

土井虎賀壽

ゲシタルト心理學はウェルトハイマーの運動知覺に關する研究(Wertheimer, Experimentelle Studien über das Sehen von der Bewegung. 1912.)を出發點とする若年の、それ故に亦最も潑溂たる發展道程にある心理學的研究方向を意味する。正しく二十幾歳の青年時代を生きつゝあるこの學派はむしろその將來にわれひと共に期待の重心を置くのであるが、現在までの業績に於ても既に驚異すべき幾多の新眞理を吾々のために解明してゐるのである。吾々は單に所謂知覺の問題に止まらず、實に全心理現象について革命的な解決を敎へられてゐる。そして吾々の問題が常に全體的であることを念願とするが故のみに止まらず、ゲシタルト心理學そのものが本質的に全體的聯關に於てのみ成り立つものであるが故に、――吾々はゲシタルト心理學に於ける知覺の問題に立ち入るに先立つてゲシタルト心理學の全體を概觀する必要に迫られる。然るにゲシタルト心理學の全體については

既に、ウェルトハイマーと相並ぶ他の二代表者卽ちコフカとケラーとによつて優れた叙述が與へられてゐる。

I. K. Koffka, Principles of Gestalt Psychology. 1935.

II. K. Koffka, Psychologie. 1925. (siehe Lehrbuch der Philosophie hrg. von M. Dessoir. Zweiter Teil: Die Philosophie in ihren Einzelgebieten.)

III. W. Köhler, Gestalt Psychology. 1929. (Psychologische Probleme. 1933.)

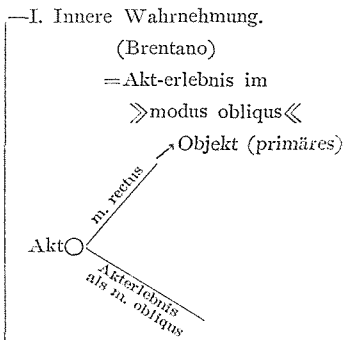
吾々の見るところによればコフカは實に優れた思想家、實に鋭い哲學的頭腦の人であり、ケラーは實に綿密な實驗家、實に深い觀察者である。從つて吾々の哲學的關心のもとにゲシタルト心理學の概觀を得るには主としてコフカの叙述に依據したいと思ふ。併しその前にゲシタルトといふのは抑々何を指さうとするのであるかを知つて置く必要がある。上記したケラーの書物の標題からも推則せられるやうに彼は Gestalt といふ獨逸語をそのまゝ英文中に導入して例へば、shape, figure, configuration, form とかによつて英譯することを避けてゐる。同書の日本譯に當つて佐久間氏は例へば型態或は形態の如く可なり熟した日本語があるにもかゝはらず矢張りそのまゝゲシタルトを和文中に導入してゐる。かゝる用意は彼等が獨逸語の (Gestalt—gestalten が語として擔ふ Dynamik をねらつてゐることを示すのである。ゲシタルト心理學は實に心理現象の力學觀に外ならぬのである。嚮に

ヘーゲル的還元法は直接的なるものの含む問題Xが矛盾の形をとり、この矛盾の解決として媒介された結實を見る辨證法的主張であることを述べ、且つ問題Xが必しも矛盾であることを要せず、少くとも具體的な事象に當面するに先立つて問題Xを一義的に矛盾として豫斷することは非批判的、非哲學的であることを述べた。ゲシタルト心理學は實にこの問題Xを『惡く形成されてゐる』《schlecht gestaltet》と解釋し、それが媒介せられた結實に於て『良く形成せられてゐる』《gut gestaltet》に轉化して解決せられることを主張するのである。還元法の二方向を代表する矛盾とゲシタルト或は辨證法と力學觀とが事象の解明に當つて如何なる關係をもち、その相互が如何なる權利と制限とをもつかを明らかにすることが吾々の一つの重要なる課題を形造る。故に吾々は先づゲシタルト心理學が實驗心理學として採用する方法論の吟味から出發しなければならない。

從來の傳統的な心理學が主として依據し、ゲシタルト心理學も亦その一つの方法として——勿論最も重要な、又最も優れた方法として——採用するものはいふまでもなく自己觀察(Selbstbeobachtung)である。併しこの自己觀察の方法は極めて困難な一つの問題を含むが故に吾々は先づその疑義を吟味しなければならない。自己觀察は吾々自身の心理現象を端的に把握することであるから、自己觀察の問題は自己知覺或は體驗知覺の問題(Problem der Selbstwahrnehmung od. der Erlebniswahrnehmung)に外ならない。* この問題は次のやうな避け難い矛盾を含むやうに見える。先づ第一

に心理學者によつてなされる體驗-知覺は心理現象をその現にあるがまゝの姿に於て把握するのでなければならない(第一命題)。他方にあつては併し觀察が現象を變更する可能性がある、否單に可能性ではない。從來體驗-知覺は實に分析的觀察として理解され來つたのであるが、かゝる分析的觀察は必然的に現象を變更する(第二命題)。この第一及び第二命題の形づくるアポリアは今日に到るまで充分に解かれてはゐないのである。

Wahrnehmung des Psychischen.



先づ第一命題から始める。體驗-知覺は事物-知覺(外部知覺)に對して優先權をもつ。何となれば外部知覺にあつてはその對象が事物そのものには無緣(フレムト)なる外裝を以つて——即ち心理現象的外裝を以つて表はれるけれども、體驗-知覺にあつては二元性に基くさういふ不都合が全く存しない。體驗

—知覺の特權たる『現にあるがまゝの姿』so wie sie sind といふことがらのうちには今述べたところ丈けでなく實に次の事情が含まれてゐる。私の心理的現實をなすことがらは體驗—知覺に於てのみ、それに於て始めて把握せられる。各人は體驗はしてゐても、彼が體驗するところを注目(メルクン)し、觀察(ベヲバハテン)するのは心理學者の立場に於てでなければならない。併し乍らこのことは第二命題の逆命題、卽ち『觀察は觀察せられるものを變更しない』を隨伴しなければならない。それは如何にして可能なのであるか。かくの如くして現象を觀察するといふことは抑々何ごとを意味するのであるか。この問ひに對する第一の答へは、體驗—知覺にあつて心理現象がその現にあるがまゝの姿に於て理解せられるといふにある。外部—知覺にあつては同じ心理的內容が他の理解 andere Auffassung を受ける、卽ち物理的存在として理解せられる。しかし理解とは何のことであらうか。この言葉は最も不幸な心理學的術語の一つである。理解といふことは本來吾々の外なる出來事に當面して一定の內的態度をとること、卽ち外の過程への適宜の反應をなすことを意味する。ある意識內容を理解するといふのはそれ故——體驗—知覺に於て表象過程 $V_1V_2V_3$……が理解せられる現象の記憶像を屢々再生し、かくてこの再生が極めて容易になされることである。卽ち體驗—知覺は觀察せられる現象の記憶像再生に外ならない。通常の態度にあつては表象の系列 $V_1V_2V_3$ が問題の現象を通過するのみで——再びその記憶像に歸るといふことがない。從つて〔一〕體驗—知覺に於て理解せられた現象と通常の現

象とは同一であり(第二命題の逆)、〔二〕意識過程は互に無關係な要素の系列に分解せしめられる、何となれば若し要素が互に影響し合ふのであれば第二命題の逆は成立しなくなるから(體驗-知覺の分析性格命題、第三命題)。

第二の答へは理解の代りに明晰性(Klarheit)を措く。卽ち體驗-知覺せられた現象は明晰であり、注意の焦點にある。現象を注意し體驗-知覺することはそれ故不明晰性を明晰性で置き代へることである。このことは逆第二命題に撞着しない。何となればこゝでは暗々裡に一つの假定がなされてゐるからである、――卽ち明晰性は現象の爾餘の徵表を悉くもとのまゝにさせておくと。例へば私が畫探しを未だ解かない場合に、探されてゐる『猫』といふ現象は私が發見した場合と全く同じい、たゞ全く明晰性を缺いてゐるに過ぎないと。これを要するに第一命題は所詮逆第二命題を要請としてそれに基礎づけられてゐるのである。

吾々は第二命題の主張に移らう。體驗-知覺は本質的に分析的であり、從つて現實に聯關的なものを破壞し、從つて本質的な變更を來す。この主張はそれを支へる經驗的な事實をもつてゐる。一定不變の刺戟にあつて『立場』或は『注意の措きどころ』によつて非常に異つた現象が見られることは心理學的研究に於て不斷にぶつつかる事實であり、而もこの現象相互の相異は決して單なる明晰性の變更として考へ得ざることがらにぞくする。例へば Vexierbild—Der Neckerscher Würfel. die

Schrödersche Treppe 等にあつては注意の焦點が相違する時全く別な異質的な現象が現はれる。更に著しい實例は Müller-Lyersche u. Zollnersche Täuschung である。然るにあらゆる心理學的記述は常に、日常生活とは異つた何等かの學的立場 Einstellung に立つものであり、從つて注意の焦點が移動して日常的現象の姿を破壞する。

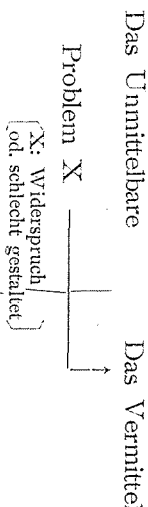
この第二命題の主張は極めて尤もであつて、實際傳統的な心理學のやうな分析的見方は日常的現象の統一性をこなごなに壞して單なる Und-Summe od. Und-verbundene Stücke に化して了ふのである。併し吾々は學的立場をとりつゝこの難點を脫することが出來る。卽ち吾々は日常的に漠然たる統一をもつてゐるものを「よりよく形成された現象」besser gestaltete Phänomene で置き代へる。云はゞ日常現象の「理想形相」seine Idealform で置き代へる。換言すれば吾々の「理解」Erfassen は、日常的現象をそれの內含する形成の方向に durchgestalten するのであつて、かくて日常生活がもつてゐる混雜 (Wirrwarr od. Chaos) を解消し、又傳統的心理學のもつ外面的機械化 (Beziehungslosigkeit der Stücke od. Und-Verbindung) を排除する。吾々の方法はそれ故に、日常的現象に於ける萠芽を花咲かせることにあり、その本性に反するやうな何事をも嚴格に戒心する。

上來說き來つたコフカの解決はこの根本的なアポリアに對する一應の解決ではあり得ても決して最後の斷案とは見做し得ない。それは日常的態度と心理學者的態度とが——ヘーゲル的に云へば現

象的態度と現象反省的態度とが――如何に關係し、如何に脈絡するかを解明することによつてのみ可能となる。蓋し《durchgestalten》の方向と樣相とが具體的に解かれなければならないからである。併しかくの如き最後の斷案は事柄の具體的研究の後にそれを媒介としてのみなされ得るものである。吾々はこゝに於て一つの哲學的問題が横はることとそしてそれを解く一つの方向としてゲシタルト心理學が一應の意味をもつことを知れば滿足である。

コフカは心理學的方法のもつアポリアをかくの如く *durch-gestalten* といふことによつて解かうとした。普通の日常的體驗にあつては恰も素人が精巧なる機械をば極めて漠然とした形態に於てしか視覺的に把握してゐないやうに極めてぼんやりとした意識である。かゝる意識はぼんやりとはしてゐるけれども猶ほ決して純然たる混沌ではなくして何等かの統一に向ふ傾向乃至萠芽を含んでゐる。かゝる傾向乃至萠芽を出來る丈け展開して明確な形態化をなさしめ、體驗の如實相を構造的全體として把握するのが心理學者の使命である。故に萠芽と展開相、傾向と完了相とが二にして而も一であるが如く、裸の體驗と觀察せられた體驗とは二にして一であり、そこにはアポリアがあると共にあらぬと言はれなければならない。

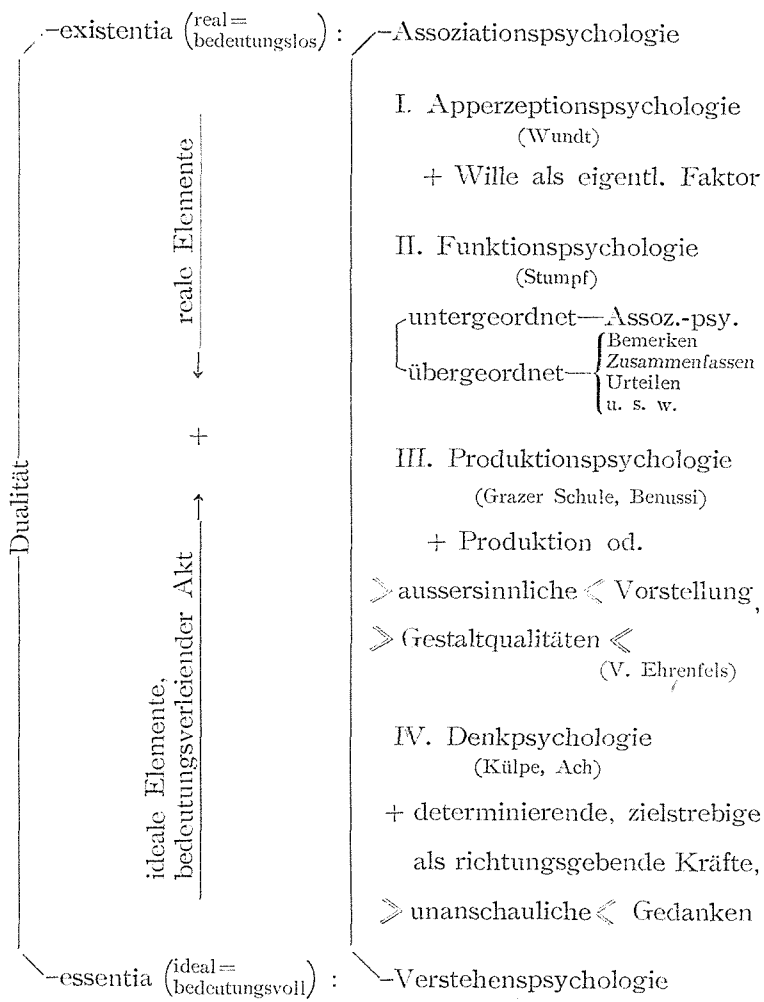
このコフカ的アポリアは單に心理學の問題ではなくして哲學の根本問題であり、實にヘーゲルの精神現象論の方法論を吾々に吟味させないではおかないのである。



ヘーゲルの還元法に於て直接的なる精神現象は直接的なるが故に自己の問題性Xを自覺せず、從つてそれ丈けで自己の問題を解決して高い段階に展開することは出來ない。卽ち還元的展開の原動力は見らるゝ現象そのものに存するのではなくして、見る哲學者の側になければならない。ヘーゲルの精神現象論はかくの如く、現象そのものの立場(für sich)と現象を見且つそれを反省する哲學者の立場(für uns)との交錯から成り立つてゐる。このことは併し決して無造作に承認せらるべきではなくして、まぎれもないアポリアとして哲學的吟味を必要とするものである。ヘーゲル自身はこの二つの立場を交互に活用しながら、兩者の相互關係は自明であるかの如くに取り扱ひ、少くともこゝに問題を發見しようとはしてゐない。そのことは併しヘーゲル自身が歷史に支配せられて、現象論の二義性に眩惑されつゝ讀者をも眩惑しようとする巧知に外ならない。現象論は第一義的には現象卽事象、事象卽眞理の立場でなければならない。從つて現象をそのあるがまゝに捉へることを標榜す

るコフカの第一命題に歸一するものでなければならない。かくの如き立場を嚴守する限り現象相互の間に眞理虛僞の區別をすることは出來ない筈であつて、あらゆる現象が一樣にその現象性の故に絕對的眞理でなければならない。然るに現象論の第二義は現象卽假象の立場である。事實ヘーゲルは精神現象論を絕對知の立場に先立つ意識の立場として、假象ではないまでも、その先一眞理的立場であることを前提してゐるのである。卽ち現象はそのまゝであるべきではなくして止揚變改せらるべきことを主張する第二命題に歸一するといふことが出來る。こゝに疑ひの餘地を殘さぬアポリアが見られるのであつて、このアポリアの前半はどこまでも für sich に相卽するのであり、後半は für uns の立場に立つことに外ならない。このアポリアが二つの相互否定的なモティーフからなつてゐることは明白なのであつて決してヘーゲル自身が信じてゐる程、又實際に適用してゐる程無批判に兩立することは出來ないものである。——

扨て併し心理學體系の代表的なるものは徹底的に經驗的なる聯想心理學と純粹に觀念的なる了解心理學とを兩極端とする範域內に配置せられる二元折衷的諸體系として理解せられる。卽ち心理現象は全く經驗的なる要素、換言すればたゞたゞ存在的(real)であつて無意味なる要素と、純粹に觀念的な(ideal)有意味なる要素、換言すれば自からは存在的でなくして存在的なるものに意味を附與する要素と——この互にその由來と本質とを異にする二要素の綜合によつて成立すると考へるのが從



Gestalt-psychologie : dynamische Identität von essentia et existentia.

來のあらゆる心理學體系に通ずる原理的な性格である。

このことがらは單に心理學についてのみならず傳統的なあらゆる哲學體系についても語られ得るものである。フッセルに於て感覺的與件（hyletische Daten）が意味附與の作用（sinngebender od. bedeutungsverleihender Akt）によつて beseelen せられる時知覺が成り立つと考へ、或はカントが感覺の多樣が悟性の綜合をうける時認識が誕生すると語る如きがそれである。これら心理學並びに哲學の傳統を形成する考へ方は一言以つてこれを蔽へば畢竟するに――『存在』と『本質』との二元性（Dualität von existentia et essentia）を前提し、それを出發點とするものである。純粹に『存在』の側から心理現象を說明する聯想心理學、純粹に『本質』の側から心理現象を考へる了解心理學――この二つの心理學の互に無關係な二原理を無關係なまゝに許した上で兩者の綜合を考へようとするものである。

然るにゲシタルト心理學は最初から――コフカの「形而上學的表現」に從へば――正しく『存在と本質との同一』を事實に卽して明らかにしようとするものである。凡そ存在的なるものは何等かの形に於て本質を孕みつゝそれを誕生する過程であり、本質は常に存在的なるものの Grund としてそれに內在し、それを動かすものである。Gestalt といふ言葉はまさしくこの存在と本質との力學的同一を言ひ現はす言葉である。聯想心理學にあつては何等の內容的關聯のない切れ切れの要素が與へられると考へ、かくの如き要素が何等の內面的理由なくして偶然に同時存在し或は繼起することか

ら習慣的に綜合が出て來ると考へる。本質とか綜合とか全體とか意味とかは全く偶然的に成立するものと考へられる。換言すれば徹底的な元子論(Atomismus)の體系である。今までの心理學並びに哲學は感覺的與件については全くこの元子論的立場に立ち、たゞかゝる切れ切れの與件を綜合する觀念的な原理を別に補つて考へるのである。然るにゲシタルト心理學はかくの如き感覺的與件の存在を否定することから出發する。存在するものは常に全體的なゲシタルトであることを主張しようとする。無意味な切れ切れの感覺的與件が先づ存在して、その上で原理的に全く新しい意味附與の作用が加はるといふのではなくして、そもそも感覺的與件そのものが存在しないことを主張する。存在する限り何等かの程度に組織せられた全體的なゲシタルトであり、從つてそれは存在であると同時に有意味的本質をもつ。何となれば部分が組織の全體にあつて占める位置と役割りとが意味と呼ばれ、本質と呼ばれるものに外ならぬからである。Gestalt といふ言葉は元來全體的本質を孕みつつそれを誕生する過程、卽ち本質誕生の存在力學的過程を意味するものであるが、今若し事態を明瞭にするために分析的表現が許されるならば孕まれつゝ結實として誕生し來るものが Gestalt であり、孕みつゝ誕生する組織過程(組織作用ではない)が gestalten であると語ることが出來るであらう。組織過程は存在する力の關係によつて惹き起され、この力の相互制約は自からにして Gestalt を目指し、Gestalt の誕生に到つて始めて均衡を得る。アリストテレース的に語るならば gestalten は動力

因による運動であり、それはやがて Gestalt を目的因とするものである。目的因に向つて動く動力因が gestalten を成り立たしめ、動力因による運動の到着點が Gestalt を成り立たしめる。動力因と目的因との歸一、存在と本質との同一――これがゲシタルト心理學を動かす原理的なモティーフであり、故にまたそれの哲學的意味を成り立たしめる。

ゲシタルト心理學はかくの如きモティーフのもとに最も嚴密精細なる實驗を媒介とする。吾々は知覺の問題について學的な解決を得んがためにゲシタルト心理學を檢討しようとするのであるが、實はゲシタルト心理學的研究そのものが知覺の問題を以つて始められたのであり、且つ又ゲシタルト心理學の現在に於て最もかがやかしき業績を擧げてゐる部門も亦知覺の問題である。故に吾々は主として知覺の問題についてゲシタルト心理學を吟味する。たゞ全體から切り離された知覺の問題は方法論的にも內容的にも不可能であるから、知覺を中心としつゝゲシタルト心理學を見渡さなければならない。吾々の次の仕事であるベルグソン、アリストテレースの問題を顧る時特に全體的な檢討が要求せられる。

ゲシタルト心理學は自からを『行動の學』Science of behaviour と定義することによつて從來のあらゆる問題を包括的に取り扱ひ得る立場を築く。卽ち意識或はプシュケーの問題も亦行動論の本質的一部門として考へられ得る。併しその際注意せらるべきことはこゝに行動と呼ぶものを所謂行動

心理學 Behaviourism に於ける行動と峻別しなければならぬことである。吾々はこの二種類の行動を全體的行動及び元子的行動 molar behaviour and molecular behaviour by Tolman として區別し或は態度及び外的行動 Gebaren und äusseres Verhalten といふ名稱によつて區別する。全體的行動或は態度といふのは例へば「學生が教室に出席したり」、「講師が講演をやり」、又は「フットボール・ゲームに熱中したり」することである。元子的行動或は外的行動といふのはかゝることがらとは異つた全く別の過程である。卽ち、動物の感覺機關の表面に刺戟が與へられるとき、これが神經纖維を經て神經中樞に傳達せられ、そこから運動神經に移されて筋肉の收縮或は腺分泌を惹き起す——この感覺神經に始つて運動神經に媒介される全過程がそれである。扨て人類の九〇パーセントまでは全體的行動は知つてゐても元子的行動のことを氣附かない。生理學を學んだ若干の人々は全體的行動が筋肉の收縮をふくみそれが吾々の四肢を動かすこと、且つそれらが神經興奮によつて惹き起されることを知つてゐる。このことから行動心理學的主張に移るのはたゞ一歩である。卽ち、——全體的行動は第二次的な現象にしか過ぎない、それは非常に多くの生理過程が複合して出來た結果であつてその故に誰人にも氣附かれる現象に外ならない、故にかゝる現象を成立せしめる基礎的過程は生理的な元子的行動であり、科學の研究はこの第一次的現象としての元子的行動に向けられなければならない。かくの如き主張は恰も聯想心理學に於てさうであるやうに、第一には部分に實在

性を與へて全體の實在性を否定するものである。全體的行動は眞實には元子的行動に解消せらるべき假象的現象と考へられる。第二にはその必然的結論として意味或は意義（Sinn und Bedeutung, meaning and significance）が單なる偶然に歸せざるを得ない。シーザーがルビコンを渡り、ベートーヴェンが第九シンフォニーを作曲するやうな全體的行動は刺戟反應的行動によつて理解せらるべくもないと云はねばならぬ。

全體的行動について最も一般的に語られ得ることはそれが環境 environment に於て起るといふことである、――これに對して元子的行動は有機體内部に生ずるのであつて、たゞそれが刺戟と呼ばれる環境的要素をきつかけとするといふに過ぎない。この際併し環境と呼ばれるものに二つの原理的な種別が考へられて來なければならない。今獨逸の一つの物語りを想起しよう。ある眞冬の夕暮時荒れくるふ吹雪をついて馬の背にまたがつた一人の旅人が宿場に辿りついた。彼は數時間に亙つてあらゆる道と野とをうづめつくした積雪の上を走らせたのだ。さて彼が檐端に下り立たうとした時それを見た宿の亭主は駭いて尋ねた、何處からいらしたかと。旅人はまつすぐに宿の前方を指して見せた。亭主はうめきといぶかりとをこめておし出すやうに口走つた。何とあなたはコンスタンス湖上を驅けて來たのだと。旅人はこの一言で石のやうに凍たく亭主の足下にころがり落ちて悶絶した。

この旅人の行動は如何なる環境に於て起つたか。いふまでもなくコンスタンス湖である。併し乍ら彼が驅けて來た場所が普通の頑丈な地面でなくて氷結した湖であつたといふ客觀的な事實そのものはこの際旅人の行動にとつては何事をも意味しない。大切なことは――彼が『實際』にやつてのけたことが何であるかを言ひ聞かされて戰慄した旅人は、若し事前にこのことを知つてゐたならば決して馬を飛ばしはしなかつたといふことである。故に彼の行動そのものは「湖を驅け渡つた」のではなくて「原野を乘り切つた」と語られなければならない。客觀的には湖であらうとも、若しそれが湖として知られて居れば彼の行動は起らなかつたのであつて、彼の行動の行はれた環境は湖としてでなく原野として彼に意識せられた場所に於てでなければならない。かくて吾々は云はゞ客觀的な環境と云はゞ主觀的な環境とを區別しなければならない。換言すれば地理的環境 geographical environment と行動的環境 behavioural environment とを決して混同してはならない。行動は行動的環境に於て起るのであつて、決して地理的環境に於て行はれるのではない。

註傍1。地理的環境を絶對的にとるところにコフカの自然科學的獨斷がある。地理的環境も亦何等かの意識を媒介とする行動的環境でなければならない。たゞそれが所謂行動的環境を媒介する意識よりもより自然科學的客觀化に向つて進められてゐるといふに止まる。この獨斷から以下の色々な制限が出て來る。一旦徹底的な現象論を通過することなしに客觀性を承認することは獨斷論のそしりを免れない。

行動はかくて行動的環境に於て起り、それによつて規制せられることを知るのであるが、如是の

行動的環境は二個の條件に依存する、――卽ちその一は地理的環境に由來し、他は有機體に由來する。地理的環境に關する吾々の意識によつて行動的環境が成立するが故である。併し乍ら行動が地理的環境に於て起るといふ言ひ方にも正當な理由が見出される。何となれば先づ第一に、行動的環境は地理的環境に依存するが故に、この言ひ方は行動をその直接因(行動的環境)に關係させる代りに客觀的な間接因そのもの(地理的環境)に結びつけて考へるのであつてその限り決して誤りではない。

傍註Ⅱ。「行動的環境が地理的環境に依存する」といふ考へ方は傍註Ⅰと同一誤謬に坐す。行動的環境を客觀化の方向に轉化する時そこに始めて地理的環境が成立するのである、恰も Heidegger に於ける Zuhanden-Sein が客觀的理論の立場で第二次的に Vorhanden-Sein として成立するやうに。存在論的にはむしろ行動的環境の方に優位性が見出されなければならない。直接に存在的に語り依存を說くのは獨斷であると言はねばならぬ。

第二には、單に行動的環境のみならず地理的環境そのものが行動によつて變更せられるのである。例へば果實は食はれて果實としては存在しなくなる。行動が行動的環境に於てのみ行はれるのは精神異狀の如き例外的な場合にのみ止まる。

傍註Ⅲ。これも亦同一誤謬。行動的環境は有機體內部に存在する (p. 65) 非客觀的なものと考へられてゐるが故に、それから全く獨立したものとして客觀的な地理的環境が考へられる。一種の模寫說がとられてゐるのである。後に精細に證示するやうに、又前にも述べたやうに、――兩者は決して存在と模寫の關係ではなく、何れもが存在的であり、客觀的である。行動は決して模寫的な環境に於てでなく飽くまで存在的な行動的環境を要求する。コフカに於ける行動的環境と地理的環境とは同一なる存

在者の So-Sein の相違である。後者はその So-Sein が普遍妥當的姿に於て把握せられてゐるに外ならない。Da-Sein に關して兩者は決して優劣をもち得ない。コンスタンス湖を原野として意識する時とそれを湖として認識する時とでは同じ Da-Sein に對する So-Seins-Auffassung が前者は暫定的妥當、後者は普遍的妥當をもち得る形で成り立つたといふに止まる。

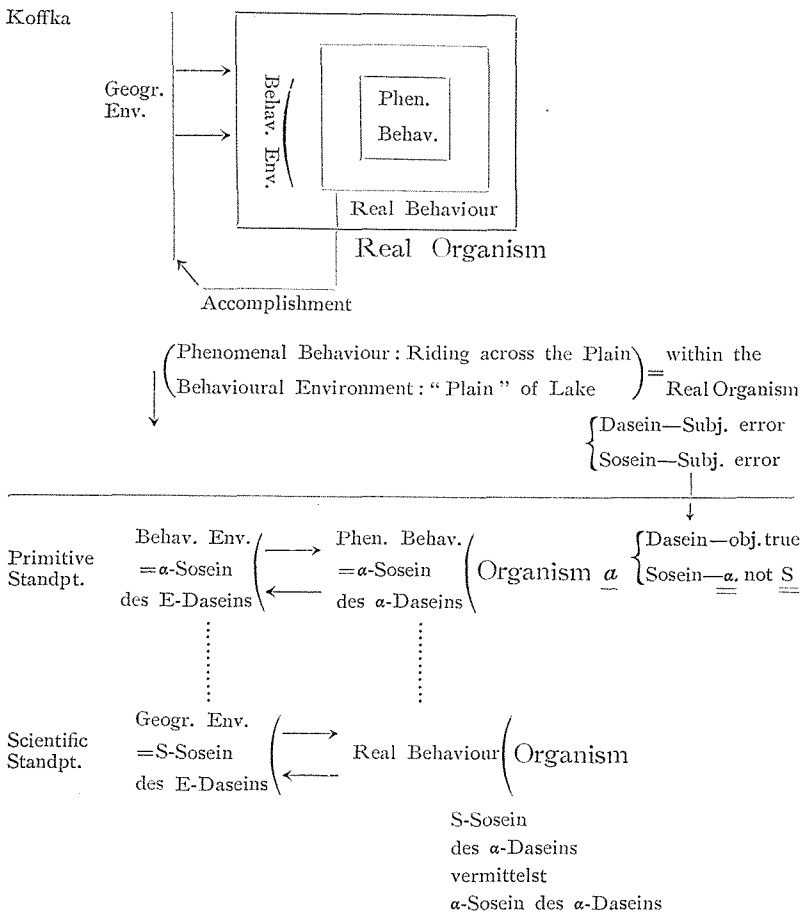
第三にこの言ひ方は次のことを明らかにするに役立つ。今ある登山家が足を踏み滑らせたと假定せよ、そして數百フィートを轉落したと思へ。この際この有機體の運動は全く地理的環境によつて決定せられる。彼が意識を失ふに先立つて彼は止まらうとして狂氣じみた努力をするであらう。これらの努力は行動的環境に於ける行動と言ひ得るであらうが、併し同時に彼の身體は行動的環境の有無、意識の有無に係はりなく落下しつづける。この事實からして吾々は次の如く結論する。行動的環境に於て起る有機體の運動のみが行動と呼ばるべきであつて、單に地理的環境に於てのみ起る運動は行動でない。尤も吾々はこの定義に於てあらゆる行動が運動だと主張してゐるのでないこと勿論である。

傍註IV。環境の二種について原理的隔絶を認めない吾々はこの定義をかくの如く言ひ現はす。當事者の當時に於ける行動的環境の有無に從つて行動と運動とが區別せらるべきである、と。

かくて一般に行動は行動環境に於て——或は少くともそれを媒介として——行はれることを知る。そして行動環境は行動主體の異るに從つて異るものであることも明らかである。扨て併し意識は單に行動環境にのみ係はるのではない。吾々は吾々の行動そのものをも、亦吾々自身をも意識してゐる。ところで吾々の行動は原理的に三つの種類に區別せられなければならない。第一には事實

的行動(real behaviour)、第二には外觀的行動(apparent behaviour)、第三には現象的或は經驗的行動(phenomenal or experienced behaviour)である。第一事實的行動は客觀的な行動の事實を意味する。第三現象的行動は吾々自身に意識せられた限りの吾々の行動である。第二外觀的行動は他の行動主體の行動環境のうちに見られた吾々自身の行動である。これらについては併し多少の註釋を必要とする。事實的行動と現象的行動とは地理的環境に於ける行動と行動環境に於ける行動として考へ得るが如くであるが實際は決してさうでない。今三匹の鼠を同じ迷路の入口から出口へ向つて走らせる場合を考へる。ある鼠は食物をめがけて、他のものは探りのために、他のものはたゞ何となく落ちつかぬ興奮のために走る。その際入口には食物が置かれてないのみならず、食物から發散される如何なる刺戟もない。にもかゝはらず食物を求める行動が起るとすれば、それは明らかに行動環境に於てである。他の場合も同樣である。この際地理的環境に於ける行動が事實的(リアル)な行動であると語ることは許されない。何となれば食物を求める行動は、たとへその際の地理的環境に全く食物がない時にもなほ、事實的行動であるからである。勿論その際食物を求める行動は目的を達しない。にもかかはらずそれが食物を求める行動であることは事實である。故に事實的行動は決して現象的行動と原理的に異るものではなく、むしろ前者のある一部分が行動者自身の意識に現はれたものが後者であるに過ぎない。地理的環境と行動環境との間に見られる關係はむしろ、現象的行動と外觀

的行動との間に見られる。例へば汗が出た爲に帽子をとつた私の行動が女の人に敬禮したと他の人に考へられる場合の如くである。



こゝで便宜上傍註IIIIIIIVに述べたことがらを一括しておきたいのであるが、この際コフカに於ける謬見のよつて來るところは——意識=主觀的=有機體內在といふ一見尤もな常識的主張である。そして同時に客觀的地理的存在があらゆる

意識の媒介なしに成り立つと考へる獨斷である。吾々は吾々の立場を築いた上でこの問題を原理的に解決し得ると信ずるのであるが今こゝで先取的に事柄の輪廓丈けは明らかにして置く必要がある。この問題は現象主義（Phänomenalismus）といふものを原理的に本來的な姿で明らかにすることを要求する。アリストテレース風に語るならば知覺能力のエネルゲイアと知覺的存在のエネルゲイアとは一にして同一であり、思惟能力のエネルゲイヤと思惟的存在のエネルゲイアとは一にして同一である。而も凡そ存在は知覺的存在であるか思惟的存在であるか何れかであつてその他に存在は考へられ得ない。存在と意識とがそのエネルゲイア態に於て同一であるといふこのアリストテレースのテーゼが本來的な現象主義そのものに外ならないのである。吾々は併し今一歩を進めて次の如く語るであらう。存在と呼び意識と稱せられるものは一にして同一なるエネルゲイア卽ちファイノメノンを地盤とし、又出發點として後から抽象的に考へられ、取り出されたものである。同一エネルゲイア、同一現象をそれに內在する二方面に分析して考へる時一方に存在、一方に意識が考へられる。卽ちファイノメノンがそれを擔ふ資料と共に考へられる時存在であり、ファイノメノンが資料から區別されたものとして考へられる時意識である。故に意識はアリストテレースにあつて「質料なしに形相を把握する能力」と定義せられてゐるのである。從つて形相と言ひエネルゲイア、ファイノメノンと言ひ、それは一にして同一なるものである。そしてまた、それらは同時に存在のエネルゲイ

アであり意識のエネルゲイアである。存在の形相と意識に於ける形相とは一にして同一なるものであつて、決して二つの重複的なものではない。カント以前の模寫說とカント以後の客觀化說とは共にこの同一なる形相を重複的に考へ違へてゐるのである。模寫說にあつては先づ存在の側に存在の形相があると考へられ、然る後それが第二次的に意識の面に投影せられるとなすのである。客觀化說は先づ意識の側に意識內容として形相があると考へられ、それが第二次的に客觀化せられて存在の形相が成り立つと考へてゐるのである。二つの考へ方は眞實には一にして同一なるべき形相を無要にも二重化してゐるに外ならない。まことにヘーゲルが語つたやうに、神は人間の眼に於てのみ神自身を見る。存在は意識に現象することなしにはエネルゲイアでなく、從つてそれは無でなければならない。吾々はこのことをヘーゲルの範疇論に係はらしめて次のやうに語ることが出來る。存在は單なる有卽ち相-存在(Sein=So-sein)ではない。相-存在は直接的には沒落する外ないのであつてそれは必然的に本質的なるものに媒介されなければならない。換言すればそれは實在的なるものの現象面でなければならない。實-存在(Da-sein)はかくして相-存在を媒介するものであるが、併し又この實-存在そのものがそれ丈けとして相-存在から切り離されて考へられる時それは全く無內容な無に歸する。實-存在は實-存在たるための本質上必ず相-存在を媒介する姿に於て現はれなければならない。換言すれば實-存在は相-存在を媒介する限りエネルゲイアであるといはねばならな

い。簡單に言ひ表はせば――語弊を伴ふおそれはあるが――相-存在に現はれ、そこに働きつゝあると考へられる限りに於て實-存在はエネルゲイアとして實-存在である。アリストテレスに於ける質料は正しく相-存在から抽象され、それに對立せしめられた限りの抽象的デュナミス的實-存在である。併し質料は基體（ὑποκείμενον）であるが故に形相を支へ、形相をして存在せしめるもの卽ち形相をして形相たらしめるエネルゲイアでなければならない。アリストテレスが本質（τὸ τί ἦν εἶναι）を質料であり形相であり、又その何れでもないといふアポリアは實にこの媒介的エネルゲイアを目指して語られてゐるのである。實-存在に媒介された相-存在が形相としての形相であり、エネルゲイアとしての本質である。併しかくの如く語られ、かくの如く考へられるのは吾々の思惟に於てであり、概念に於てでなければならない。單なる相-存在は知覺に於て、單なる實-存在はカントの物自體を考へる抽象的思惟に於て把へられるであらうけれども、相實二存在の媒介的エネルゲイアは具體的思惟に於けるエネルゲイアでなければならない。これ卽ちヘーゲルに於ける概念(Begriff)でなければならない。本質的存在は概念的エネルゲイアと一にして同一である。本質的存在をエネルゲイアとして現前することなくして概念は概念ではなくなる。卽ちこゝに於ても概念のエネルゲイアは本質的存在のエネルゲイアと一にして同一である。

吾々はヘーゲルに於ても存在と意識がエネルゲイアに於て一にして同一であることが少くとも――

―本質と概念の段階に於て主張せられてゐることを見る。たゞ彼は知覺と知覺的存在については明確にこのテーゼを認めてゐないのであつて、その點に彼の論理主義の長所と短所とが同時に見られる。吾々自身も亦彼の論理主義的結論である本質と概念とのエネルゲイア的同一といふテーゼに到達する筈であるが、今はそれに到るに先立つた段階に於て現象主義そのものを嚴密に規定し、それを到處に殘るくまなく貫徹しなければならぬのである。ヘーゲルの論理主義的結論は嚴密な現象主義によつて耕された地盤の上で始めて批判的にうちたてられ得ることを信ずるからである。

かくて吾々は存在の形相は直ちに意識的形相たることを主張しなければならない。存在は知覺的にしろ思惟的にしろ吾々の外に超越するものでなければならぬが故に、形相は內在的―超越的二重性格に展開せられ得る根原的なエネルゲイアである。存在と意識、超越と內在が分裂するに先立つ基礎的ファイノメノンである。故に吾々の今の問題に立ち歸ればコフカのいふ行動環境と地理的環境とは決して一が內在的で他が超越的とは語り得ない。兩者は多くの場合例へば知覺的存在と思惟的存在として考へ得るであらうが、アリストテレース的に言つて知覺と思惟とは各々その對應する存在に對して同樣な仕方で關係する（アリストテレースにあつては同時に、逆に思惟的存在が內在的とすら語られてゐる）。エネルゲイアに於て存在と意識が一であり、抽象的には存在が意識を超越することについて知覺の場合は全く思惟の場合に同じい。異るところは知覺的エネルゲイアと思

惟的エネルゲイアとが吾々の人生觀、世界觀の上で意義を異にするといふことから出て來る。――

吾々は環境と行動について一應の分析をしたのであるが、更に兩者の關係を力學的に理解する爲に「場」の概念をとつて來なければならない。而してこの「場」(field, Feld) の概念こそ心理學をして他の科學と聯關せしめそれを一般に科學的たらしめるものである。現代科學を代表する物理學はニュートンの重力の法則によつて運動を力の關係として理解した。そしてその際猶ほ神祕的な響きをもつて殘されてゐた遠隔作用 action at a distance は、ファラデイ及びマックスウェルによつて力の傳達を媒介する電磁氣の場が嚴密に規定せられることによつてうち克たれた。アインスタインの重力理論にあつては遠隔作用は完全に姿を消し「重力の場」が導入された。空虛な單に幾何學的な空間は全く物理學から消え失せて、重力の場に於ける strain and stress の體系が置かれた。從つて重力の場に於ける狀勢は物體の運動を嚴密に規定し、逆にまた物體の運動が知られればそれの於てある場の狀勢を知ることが出來る。かくの如くにして場と物體の運動とは互に相關的に考へられる。

然らば心理學に於て「場」は如何なる性格をもつか。卑近な實例をとらう。今吾々がふりそゝぐ陽光のもとを山巔にたたずんでゐるとしよう。この時吾々は全く無心に環境と交はつてゐる。突如助けを求める叫びが耳をつんざくに到つて吾々の靜穩は破られ環境は一變する。同質的であつた環境の均衡はこの瞬間に破られたのである。吾々の行動はかくの如くにして力の場に於ける均整の破れ

を豫想し、從つて異質的な場を要求すると語られる。レウィンが「戰場」についてなした分析はかゝる異質的な力の場を最もよく示すものである。ピアジェが子供の世界について、レヴィ・ブリュルが未開人について明らかにした行動的環境は注意せらるべき心理學的力の場でなければならない。

併し乍ら心理學的場は單に行動的環境のみでは盡せない。何となれば例へば所謂反射運動は行動的環境の媒介なくして行はれ、從つて他の力の場を要求する。或は又記憶の如きものも亦他の場を要求する。吾々はこの故に生理的場をも含めて一般に精神-物理的場 psycho-physical field を心理學的場と考へる。かくて吾々の心理學的研究は次の如きものであらう。

一、先づ場の成立を明らかにせなければならない。

二、場を成り立たせる諸々の力が如何にして身體の運動乃至行動を呼び起すか。

三、場に於ける一つの主要部としての自我體系 Ego-System の問題。

四、自我體系と場に於ける他の部分とをむすぶ力の問題。

五、精神物理的場が有機體內部にあり、且つ有機體そのものが地理的環境の內にある限り、事實にかなつた意識及び行動が如何にして可能であるかの哲學的問題。

これらのうち吾々の關心を要求する問題は次の三つである。

〔一〕知覺論　恒常假定批判。感覺批判。〔二〕生理學論　元子論批判。〔三〕記憶論　聯想律批判。